本誌はネット配信のみとなっています。紙での配布は行っていませんのでご了承ください。

埼玉県立
歴史と民俗の博物館

彩の国埼玉県

THE MUSEUM

Vol.14-1　第40号　2019. 8. 14

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

柔軟な発想と対応ができる博物館に

この度の文化財保護法等の改正は、文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取り組むことを促しています。文化財保護の事務や博物館をはじめとする社会教育施設の所管を首長部局で担当することも可能になりました。

また、いよいよ、9月にはラグビーワールドカップが日本で開催されます。来年のオリンピック・パラリンピックも含め、今後、博物館は観光振興や国際交流の拠点としての要素が期待されてきます。

博物館を取り巻く環境は大きく変わろうとしており、今後、新たな役割やスピードが求められるようになると思います。

歴史と民俗の博物館は、その使命をしっかり果たしながら、新たな動きに対して柔軟な発想と対応ができる、そのような博物館を目指してまいります。

（館長　小澤健史）

北沢楽天(本名:保次)は、明治末期から昭和初期にかけて活躍した漫画家で、「日本で最初の漫画家」と評価されています。この展覧会では、楽天の作品を中心に、約 150 点の資料を展示しています。

第Ⅰ章　北沢楽天と「漫画」の誕生

北沢家は埼玉に深い縁があり、江戸時代には中山道の大宮宿に屋敷を構え、紀伊徳川家の鷹場本陣を務めた名家でした。明治を迎えると北沢家の屋敷は県庁の仮庁舎などに使われたため、明治9年(1876)の初め頃までに東京・神田へと転居しています。楽天が生まれたのは、この年の7月でした。

楽天は 18 歳の時、横浜で刊行されていた英字新聞「ボックス・オブ・キュリオス」に入社しました。ここで出会ったのが、オーストラリア人の漫画家、フランク・ナンキベルでした。楽天はナンキベルからカリカチュア(風刺的な似顔絵)の技法を学び、西洋の風刺画から大きな影響を受けました。

楽天が描いた風刺画に目を付けたのが、新聞「時事新報」でした。時事新報社は福沢諭吉が創立した新聞社です。楽天は明治 32 年(1899)に時事新報社に転職しました。この頃は本名の保次を使っていましたが、明治 36 年(1903)の末頃から「楽天」を名乗り始めたようです。明治 38 年(1905)創刊の漫画雑誌『東京パック』での活躍は国内外に大きな影響を与え、楽天の人気を確実なものとしました。『東京パック』は、日本初のフルカラー漫画雑誌でもあります。

写真1　北沢楽天(明治 42 年頃)
(さいたま市立漫画会館提供)

写真2　『東京パック』第1巻第1号
(さいたま市立漫画会館蔵)

当時「漫画」は一般的な言葉ではなく、「ポンチ」などと呼ばれていました。楽天はこうした言葉に低俗さを感じており、「漫画」や「パック」という言葉を積極的に使うことで地位の向上に努めました。今日の意味での「漫画」という言葉が一般に定着していく過程で、楽天の業績は非常に大きいものであったと言えます。

第Ⅱ章　時代を切り取る風刺漫画

明治 45 年(1912)に『東京パック』を去った楽天は、再び時事新報社を活躍の中心としました。大正 10 年(1921)には、時事新報に掲載していた漫画特集欄を独立させる形で、日曜版別冊「時事漫画」が始まりました。

写真3　「時事漫画」第1号(当館蔵)

タイトルこそ「漫画」ですが、時事の話題や小説、生活に役立つ情報なども掲載されました。後には読者による投稿漫画コーナー、懸賞クイズといった参加型企画も始まり、家族みんなで楽しめる紙面づくりの工夫が続けられました。

表紙の絵は、主に楽天が描いた風刺画でした。取り上げられたテーマは、政治風刺の他、社会に生じた矛盾、日常の一コマから着想を得たものなど多岐にわたっています。いずれも社会問題や話題を集めた事件などを鋭い視点から切り取っており、楽天の目を通じて当時の社会風俗を知ることができる、貴重な資料となっています。

楽天は、才能がある若者を数多く見出し、育てた教育者でもありました。『東京パック』で執筆していた川端龍子、坂本繁二郎、石井鶴三らは、後に芸術の分野で名を残しました。麻生豊のように「時事漫画」以外で活躍した漫画家もおり、後の漫画界に大きな影響を与えています。

新聞日曜版の先駆けとして成功をおさめた「時事漫画」ですが、これにならって他社も付録を充実させました。その結果「時事漫画」の優位性は揺らぎ、紙面の刷新が図られます。その一つの象徴が、昭和4年(1929)から 1 年間、楽天が海外渡航したことです。

写真4 「時事漫画」第 309 号　渡航する楽天(当館蔵)

楽天は個展の開催が目的と述べていますが、海外の文化・芸術から新しい刺激を得ようとしたのではないかと考えられています。楽天が海外の各地で見たことは「時事漫画」の表紙に描かれ、毎週読者のもとに届けられました。

ロンドンでの個展の開催、フランス政府からの勲章授与など、楽天の絵は海外でも受け入れられました。

しかし、紙名を変更するなどのテコ入れ策も功を奏さ

ず、「時事漫画」は昭和7年(1932)の 10 月に終刊しました。楽天もこの年の7月に時事新報社を退社し、漫画家としての第一線を退きました。

第Ⅲ章　画家・北沢楽天

楽天が描く漫画のベースには、若い頃に学んだ洋画がありました。海外で受け入れられたのも、日本の社会風俗を題材にしたことの物珍しさだけでなく、確かな絵の技術があったからだったのでしょう。

漫画家としての活動と並行して、楽天は多くの絵画作品を残しています。ことわざや故事などを題材にしたコミカルな描写には、漫画家・北沢楽天のユーモアが存分に発揮されています。中には、「時事漫画」に描いた漫画を、絵画として書き直したものもあります。

この展覧会では、当館で所蔵している作品の他、さいたま文学館や近代美術館といった県立の施設、そして、さいたま市立漫画会館が所蔵している作品を借用して展示しています。当館や漫画会館の新収蔵品を初公開する他、各施設でも普段なかなか展示されることがない優品が揃っています。

写真5　　左：仙桃図（当館蔵）　右：愛の囁き（当館蔵）

晩年の楽天

漫画家を引退した後の楽天は、自宅のアトリエを開放した塾を設立するなど、後進の指導に力を入れました。昭和 23 年(1948)、疎開先の宮城県から大宮に転居した楽天は盆栽町(ぼんさいちょう)に新居を構えて、「楽天居(らくてんきょ)」と名付け、悠々自適(ゆうゆうじてき)の日々を過ごしました。

昭和 30 年(1955)の8月、楽天は 79 歳で亡くなりました。当時の大宮市の名誉市民第一号となり、遺品と楽天居は市に寄贈されました。楽天の墓は、北沢家の菩提寺であった大宮の東光寺(とうこうじ)境内にあります。近年の改装で、楽天が生んだ代表的なキャラクター「丁野抜作(ていのぬけさく)」の石像などが設置され、ユーモラスな場所に生まれ変わっています。

絶大な人気を誇った北沢楽天ですが、残念ながら現代における知名度はそれほど高くありません。この機会に作品をご覧いただき、漫画、絵画に表現された奥深い世界に触れていただければ幸いです。

（展示担当　堀口智彦）

写真6　北沢楽天の墓（さいたま市大宮区・東光寺）

特別展「東国の地獄極楽」こぼれ話

前日の地獄極楽

平成 31 年 3 月 16 日から令和元年 5 月 6 日まで、平成と令和の世をまたいで開催された特別展「東国の地獄極楽」。おかげさまで無事に終了してから 3 ヶ月経ちました。本展に出品された文化財には、どれも担当者の思いがいっぱいに詰まっているので、展示の思い出話は尽きません。そして、各所蔵者の方のご理解とご協力なくして展覧会を実現することは叶いませんでした。本稿では、特別展「東国の地獄極楽」開催の前日譚として、数々の寺院や博物館等施設で行った調査の中からいくつかピックアップしてご紹介したいと思います。

展覧会を準備する上で最も大切な仕事の一つである、展示のストーリーを考えるという作業を行うにあたって、実際に仏さまや資料を訪ねていくことで得られる発見は非常に重要です。「埼玉県を中心とした関東における中近世の浄土信仰の歴史と美術」という、本展のメインテーマに沿って各地で調査を重ねました。

ゆかりの地として幾度も足を運んだのは神奈川県鎌倉市です。材木座海岸を望む風光明媚な場所に所在する、浄土宗大本山光明寺に伺いました（写真1）。こちらは、記主禅師良忠上人（1199～1287）の開山した寺院で、関東の浄土宗の歴史を考える上で非常に重要な場所です。良忠上人ははじめ九州で修行していました

写真1　春の光明寺

が、その後関東へ進出し、浄土宗の教えを広めるにあたって光明寺を拠点としました。光明寺には数多くの浄土宗ゆかりの宝物が大切に安置されています。例えば重要文化財「当麻曼荼羅図」。阿弥陀如来がその住処である極楽浄土で説法する様を描いた巨大な作品でした。その制作時期は 13 世紀と推定されていますので、もしかしたら良忠上人も本作を拝んだかもしれません。

次に紹介するのは、福島県会津若松市に所在する福島県立博物館です（写真2）。会津地域は埼玉県寄居町を発祥の地とした浄土宗藤田派という浄土宗内の流派が活動した重要な場所です。藤田派は、現在は流派としてはなくなってしまっていますが、その遺品は各所に現存しており、中でも逸品として知られる作品が福島県立博物館の所蔵となっています。それが重要文化財「阿弥陀二十五菩薩来迎図」。現在は福島県立博物館の所蔵ですが、かつては高巌寺という藤田派寺院の宝物でした。本作は、いまわの際にある者を阿弥陀如来が

写真2　冬の福島県立博物館

極楽浄土から迎えに来る「来迎」の様子を劇的に描いたものです。画面を具に眺めると、繊細な截金（金箔を細く切って貼り付けて模様を描くこと）が施されているのがわかります。たいへん美しい作品でした。

特別展「東国の地獄極楽」では、県内外の所蔵者のご協力のもと、数多くの素晴らしい文化財を紹介することができました。どれもただ美しいだけでなく、深い信仰の歴史を持っています。お盆やお彼岸の時期に、お寺に行くことも多いと思いますが、この機会に心静かに身近な仏さまに手を合わせてみてはいかがでしょうか。

（展示担当　西川真理子）

歴史のしおり 84　文学とモデル地との関係について―『赤毛のアン』の事例から―

カナダの東にある小さな島、プリンス・エドワード島をご存知でしょうか。人口 15 万 3 千人ほどの小さな島ですが、春から秋にかけて 100 万人を超える観光客が訪れます。ここは、美観や美食の島として知られていますが、小説『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*.1908)の舞台としても有名です。そのため、この地にはカナダ国内だけでなく、世界各地からアンのファンが訪れます。

個人的に、私も今夏この地を訪れましたので、文学作品とモデル地の関係について『赤毛のアン』の事例をご紹介いたします。

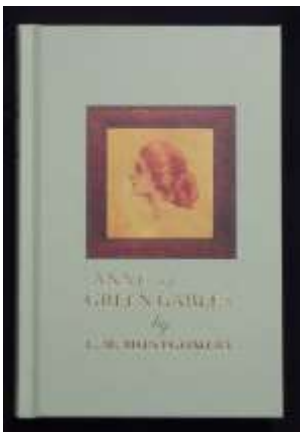

写真1
"Anne of Green Gables"
初版本を基にした特装版
(Kindred Spirits Pub.2019)

『赤毛のアン』の作者、L.M.モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery,1874-1942)はプリンス・エドワード島(以下、PEI と表記)のクリフトン(現在のニュー・ロンドン)にて生まれました。早くに母を亡くし、祖父母に育てられた彼女が『赤毛のアン』の執筆に取りかかったのは 30 歳の年からです。そして 1908 年、処女作となる『赤毛のアン』が出版されると、たちまち世界中で人気を博しました。日本では昭和 27 年(1952)に、村岡花子の翻訳で初めて出版されています。アンの物語は、映画や TV ドラマ、アニメーションなど、小説の世界を飛び出して幅広く展開し、初版の発行から 100 年以上が経過した現在でも、多くのファンに愛されています。

PEI には、モンゴメリゆかりの場所がいくつも現存していますが、中でも一番有名なのがアンの家のモデルとなったグリーンゲイブルズ(緑の切妻屋根の家)です。元々はモンゴメリの親戚が暮らしていた家で、彼女は幼少期から度々ここを訪れていました。現在は国立公園として整備され、建物の内部が公開されています。アンの部屋をはじめ、客間や台所などが、作品の時代背景(1890 年前後)に合わせて再現されており、当時の PEI の人々の暮らしを知ることができる歴史資料館の役割もあります。

家具だけでなく日用品など細部までこだわって再現された各部屋を巡ると、アンやクスバート兄妹が実在し、今でもここに暮らしているのではないかと錯覚させられます。

写真2
アンの家のモデルとなった
モンゴメリの親戚の家

『赤毛のアン』の原題である *"Anne of Green Gables"* からもうかがえる通り、この家は物語の中でとても重要な場所です。孤児だったアンにとって、グリーンゲイブルズとは自分を受け入れてくれた居場所であり、「家族」の象徴でもあります。

グリーンゲイブルズ内の展示は、いかにアンがこの家でクスバート兄妹に愛され、大切に育てられていたのかを示しています。小説には描かれていない「行間」まで再現された展示空間からは、本を読むのとはまた違った感動をおぼえます。

写真3　アンの部屋の再現展示

さらに、このような展示施設だけでなく、この島そのものが、アンの物語世界を体感できる空間とも言えます。地震がほとんど発生しない PEI には今でも 100 年以上前の建物が多く残っており、随所に広がる農場や赤土の道などののどかな風景が、アンが生活していたであろう当時の面影を感じさせます。さらに、グリーンゲイブルズ周辺が国立公園であるため、自然遺産、文化的環境遺産として末永く保護・保存に努められることも環境が守られる大きな理由です。

グリーンゲイブルズの近くの墓地にはモンゴメリが眠るお墓があり、墓石を囲むように多くの花が植えられています。その光景からモンゴメリが島の人々からとても愛されていることが伝わってきますが、島民の『赤毛のアン』への愛情こそが、物語とモデル地との良好な関係を継続させる力になっているようです。

(学習支援担当　安達　愛)

学芸員ノート

博物館実習の日々 ～企画担当の仕事から～

歴史と民俗の博物館の学芸業務の中で、企画担当が携わっている仕事は、まさに裏方の仕事が主体です。ホームページの更新・イベントチラシの作成及び配布・記者発表資料の提供などの広報業務、埼玉県博物館連絡協議会など博物館団体の運営・連絡調整、大学生や高校生のインターンシップの受け入れなどさまざまな仕事があります。

今回は、その中で本年度の博物館実習の運営について少しばかりご紹介してみたいと思います。

当館で行う博物館実習は、展示、体験学習や各分野の資料取扱など、学芸業務の実際を一通り体験してもらえるよう実践的なカリキュラムを組みます。歴史・民俗・古美術・考古などの各分野の学生を対象として受け入れますが、県内出身・県内在住・県内所在大学のどれか一つを満たすことが条件となっています。受け入れる人数は 45 名を上限としていますが、本年度は 21 大学、42 名の実習生を受け入れました。共通日程 6 日(6 月 20・21 日、25～28 日)と個別日程 1 日(7 月 13 日～9 月 1 日の土・日曜日の中から、当館が各実習生に指定した 1 日)の合計 7 日間で実施しています。各実習項目の講師は当館学芸各担当の学芸員が分担してつとめます。

第 1 日目は、午前中、各担当の事業の内容を説明した後、資料調査・活用担当から、「資料・施設・環境に関する実習」として、当館でのIPMのあり方を中心にした講義とバックヤードの見学を行いました。

第 2 日目は、実習生全体を 2 グループに分けて、①体験学習実習（勾玉づくり・藍染めハンカチづくり）、②広報に関する実習（ポスター・チラシの発送作業）を、半日ずつ入れ替わりで実習しました。

写真1
考古資料取扱（縄文土器の梱包作業）

以下、第 4 日目までは 2 グループ分割の実習です。

第 3 日目は資料取扱実習で、歴史・古美術資料と民俗資料を半日ずつの実習です。歴史・古美術資料は掛軸や巻子のような巻物の資料を実際に扱う作業もやっていただきました。資料の保存状態を検品調書に記録する方法なども実践してもらいました。

民俗資料に関しては、「ゆめ・体験ひろば」に団体見学に来た学校にどのように体験させるか、という学習プログラムをグループ協議によって作成し、発表してもらって、各グループの方法に関して相互学習しました。

第 4 日目は、①資料取扱実習（考古資料）、②IPMに関する実習で、考古資料の取扱では、検品調書に土器の亀裂や接合痕を記載する方法、綿ブトンによる資料の梱包の実践です。②では、資料の清掃を行う班と捕虫トラップを確認する班に分かれて、二つの作業を体験してもらいました。

写真2
IPMに関する実習（捕虫トラップの確認）

第 5 日目・第 6 日目は展示実習で、考古資料と歴史・古美術資料の展示手法について模擬展示を行ったり、キャプションづくりも学んでもらいましたが、ケース内の清掃や、綿ブトン製作など当館にとって必要な作業を行うことにもご協力いただきました。

個別日程は、「ゆめ・体験ひろば」の体験学習指導に加わってもらいました。

この 7 日間は、実習生のみなさんにとっては、密度が濃い日々だったと思いますが、当館の学芸員たちも実習生の中から「将来の学芸員」が 1 人でも多く誕生するならば、との願いを込めて実習に取り組んだ日々であったことは間違いないと思います。

（企画担当　利根川章彦）